

惜しまれる主

主任司祭 吉池 好高

2月14日の灰の水曜日をもって今年も四旬節を迎えます。四旬節は回心のときと言われていています。この四旬節、回心の心を新たにするために、旧約聖書のヨナ書を読み返してみたいかがでしょうか。ヨナ書は回心をテーマにした短編小説のような魅力的な書です。当時の世界帝国のアッシリアの都ニネベに行って、回心を呼びかけよとの主の命令を受けた時、ヨナはその命令に反して、ニネベとは反対の地の果てに逃れようとしてタルシシュ行きの船に乗り込みます。ヨナを乗せた船は大嵐に遭って今にも沈みそうになります。

何のせいで、誰のせいでこのような災難が自分たちに降りかかったのかと問い質されたヨナは、自分が主の命令に背いて、主の御前から逃げ出そうとしていることを告白します。そして、自分を縛り上げて海に投げ出せば、嵐はおさまるというヨナのことばに従って、船乗りたちはヨナを嵐の海に投げとしたのです。最後の最後になって、ヨナは預言者としての心を取り戻したのです。巨大な魚に飲み込まれたヨナは3日の後に岸に吐き出されます。このようなことがあって、今度こそ、ヨナは主の命令どおりにニネベに行って、「あと40日すると、この都は滅びる」と告げて回ります。すると、ヨナの予想に反して、ニネベの人々は荒布を纏い、灰を被って回心したのです。それでもヨナは、ニネベがどうなるか見届けようとして、都が見渡せる丘の上に座っていると、熱風が吹き付けて、ヨナはあまりの苦しさに死を願うほどになります。すると主はとうごまの木を生えさせ、ヨナのために影を作ってくださいます。ところが1匹の虫がとうごまを食い荒らして枯らしてしまいます。

ヨナは再び死ぬことを願うのです。すると主が語りかけます。「お前はとうごまの木のことで怒るが、それは正しいことか」。「もちろんです。怒りのあまり死にたいぐらいです」。このように言うヨナに対する主のことばが全体を締めくくっています。「お前は自分で労することも育てることもなく一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。どうしてわたしがこの大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか」。